

小学校段階における同調圧力に対する 自己肯定感の影響と居場所感について

○松井柚子

高平小百合(玉川大学)

キーワード: 同調圧力, 自己肯定感, 居場所感

問題と目的

近年、いじめや不登校などの問題を抱えている児童が増加しており、それが原因となり自殺してしまう児童も少なくない。その原因の一つが、学校での仲間関係など人間関係である。子どもたちは、友達関係において常に同調圧力にさらされており、特に小学校高学年では仲間集団へ同調しやすいことがわかっている(藤原正光, 1976)。一方、大人の研究では同調しない人は自尊心が高いこともわかっている(黒沢, 1993)。諸外国と比較して自己肯定感が低いことが指摘されている日本の子ども達には、同調圧力が関係しているのではないかと考えられる。

本研究では小学校段階における同調圧力が自己肯定感や居場所感にどのように影響し、それらの影響に性差があるのかどうかを明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

神奈川県内の公立小学校の5・6年生231名(男子115名, 女子116名)を対象に質問紙によってアンケート調査を11月に行った。

質問紙

質問紙は3つの尺度: ①同調志向尺度・②居場所感尺度・③自己肯定感尺度からなり、合計41項目をそれぞれ4件法で回答を求めた。その後、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、相関分析, t分析を用いて検証した。

結果と考察

因子分析の結果, ①同調志向尺度(自己抑圧・従属) ②居場所感尺度(自己存在感・充実感・被受容感) ③自己肯定感尺度(自己受容感・対人緊張・他者評価過敏)で合計8つの因子が得られた。相関分析では, Table 1に示すように「自己抑圧」と「自己存在感」・「充実感」, 「従属」と「充実感」でそれぞれ弱い負の相関がみられ, 「自己抑圧」と「対人緊張」では比較的強い正の相関が, 「自己抑圧」と「他者評価過敏」, 「従属」と「対人緊張」で弱い正の相関がみられた。

同調志向・居場所感・自己肯定感について性差があるかどうかt分析を行った結果については, 同調志向の「自己抑圧」と非自己肯定感の「他者評価過敏」因子では有意な性差が見られ, 男性よりも女性のほうが感じやすいということがわかった。

Table 1 同調志向と居場所感及び自己肯定感との相関係数

因子	同調志向	
	自己抑圧 r(N)	従属 r(N)
自己存在感	-.277** (222)	-.089 (222)
充実感	-.389** (222)	-.203** (222)
被受容感	-.197** (223)	-.153* (223)
自己受容感	-.220** (224)	-.086 (224)
対人緊張	.477** (224)	.329** (224)
他者評価過敏	.208** (223)	.058 (223)

*p<0.05 **p<0.01

Table 2 性差

尺度: 因子	平均値(SD)	df	T値
同調志向: 男子	2.623(0.672)	226	-2.27*
自己抑圧 女子	2.822(0.646)		
非自己肯定: 男子	2.485(0.835)	224	-3.67**
定: 他者評価過敏 女子	2.875(0.757)		

*p<0.05 **p<0.01

居場所感の3因子については, 性差は有意ではなかった。

同調志向尺度「自己抑圧」の高群と低群で居場所感3因子, 自己肯定感3因子のそれぞれに違いがあるかt分析で検証した。「自己抑圧」の低群の方が高群より居場所感の「自己存在感」(df=220, t=2.42, P<0.05), 「充実感」(df=220, t=4.34, P<0.01)は高かったが, 非自己肯定感の「対人緊張」(df=222, t=-4.48, P<0.01)「他者評価過敏」(df=221, t=-2.56, P<0.01)においては, 高群の方が低群よりも有意に高いことが明らかになった。

同調することによって自己抑圧が強いほど居場所感(自己存在感や充実感)は感じられないが, 非自己肯定感(対人緊張・他者評価過敏)は強く感じられるという結果から, 同調することが居場所感や自己肯定感にネガティブに作用していることが示唆された。この結果は公的自己意識(他者から容易に知ることのできる面)の低い人は同調せず, 自尊感情が高いという黒沢(1993)の結果を指示していると考えられる。

付記

本研究は, 玉川大学教育学部に2019年度卒業論文として提出されたものに加筆・修正をしたものです。